

イエス・キリストのたとえから三つの語り

2016年5月29日（日）

「生きるを考える」の集い その一

第一部

語り部（語り手）

アンナ・ファンセット師

英国スコットランドのグランピアン語り部協会にて修業、後に同協会会長に就任
スコットランド在住時、スコットランド語り部センターの理事会の一員として活躍
現在も英国・語り部協会に所属

2009年に、自身の語り部ビジネス「Upon my Word」設立

語り一：砂上の楼閣

この語りは『マタイの福音書』7章24～29節の「二人の家造り」の話で、
イエスが話された「たとえ」である。

岩の上に家を建てた賢い人がいた。ひどい嵐がやって来て、激しい風雨がその家をたたきつけた、しかし、家は倒壊しなかった。その基礎が固かったからである。

同じ町に愚かな人がいた。彼は砂の上に家を建てた。

嵐が襲ったとき、家が倒れ、その倒れ方はひどかった。

語り二：良き隣人^{となりびと}

この語りは『ルカの福音書』10章25～37節の「良きサマリア人」の話で、
イエスが話された「たとえ」である。

ある人が長旅に出かけた。非常に寂しい所にさしかかったところ、その人は盗賊に襲われ、
すべてをはぎ取られてしまった……着ていた衣服までも！

盗賊は彼を瀕死の状態に捨て置き、その人は道のわきに喘ぎながら横たわっていた。

ある要職に就いていた人がそばを通りかかった。しかし彼は非常に忙しかったので、
その人を助けるために立ち止まりたくなかった。彼はそのまま歩いて立ち去った。

ほどなくして、宗教家がそばを通りかかり、その旅人を見た。しかし、宗教家はその人に
触れたくなかった。万が一、その旅人が死んでいた場合、彼は職業柄、死体に触れようもの
なら、宗教儀式を司ることができなくなると、恐れたからだ。

最後に凡人がそばを通りかかった。彼は金持ちでも、ひとかどの人物でも何でもなかったが、
傷ついた旅人を見て不憫^{みびん}に思った。

その人は傷ついた旅人に走り寄り、傷の手当てをし、食べ物と水を与え、自分の服を着せた。
そして彼を宿屋まで運び、宿泊費も支払った。

イエスはこの話を質問で終えられた。

「この三人の中でだれが、強盗に襲われた者の隣人になったと思いますか」と。

語り三：放蕩息子^{ほうとう}

この語りは『ルカの福音書』15章11～32節の「失われた息子」の話で、イエスが話された「たとえ」であるが、舞台設定は現代版に変えた。

語りは、若い男が目の前の新しいスーツを見ながらベッドの上に座り、つぶやいているところから始まる。

彼は、父の会社で働き始めることになっていた。が、会社に行きたくない。

兄と話したあと、しぶしぶ新しいスーツを着、朝食を食べ、父と兄に合流した。

父の会社は大企業で、多くの建物、多くの支店を持ち、一般的、平凡なビジネスから独創的なビジネスまで幅広いビジネスを手掛けている。

しかし、昼食の後、若い男は父に、会社やそれに関わる全てが嫌いだと告げる。

そこで、父は会社の全資産の二分の一を相続財産として彼に与えることに同意した。

そうすれば、彼は独自の生活、人生に乗り出すことができるだろう。

そのため父は会社のいくつかの支店を売却しなければならなかった。

このことに兄は激怒した。

しかし、若い男は相続したお金を手にして、都会に出て行った。

その若い男は当初、新生活を心から楽しんだ。

最高のホテルに滞在し、最高級のレストランで食事をし、ナイトクラブでは美しい女性とのパーティーに明け暮れた。

ところが、ある日、大きな金融恐慌が勃発。彼が全所持金を預金していた銀行が倒産。

彼は高いホテル代を支払うために、所有していた高級品の数々を売らなければならなかった。そればかりか、シェアハウスの恐ろしく汚く小さな部屋に移らざるをえなかった。

彼は肉屋の床を清掃する仕事を何とか見つけたが、それは厳しく辛い仕事で、シェアハウスの家賃を支払えるだけのお金を得るのに精いっぱいであった。

その若い男はついに、父の会社で最低ランクの仕事に就かせてもらえるなら、今よりまだ良いだろうと気がついた。

彼は故郷に帰り、父に会社で働かせてくださいと懇願しようと、決意した。

彼は、全道のりを徒歩で実家に向かった。

彼が戻ったとき、父は彼を見て大喜びし、彼のために大祝宴を開いた。

このことに、兄は立腹。

しかし父は「死んだ息子が生き返って戻ってきたも同然だ。我が子に会えるとは、なんと嬉しいことか！」と言い、彼を後継者として復帰させ、ビジネスの半分を継がせた。

第二部

話し合い

「語り三」について質疑応答へと、クリス・ドーン師が指導

語り三の聖書箇所

『ルカの福音書』15章11～32節

またこう話された。

「ある人に息子がふたりあった。弟が父に、『お父さん。私に財産の分け前を下さい』と言った。それで父は、身代をふたりに分けてやった。

それから、幾日もたたぬうちに、弟は、何もかもまとめて遠い国に旅立った。そして、そこで放蕩して湯水のように財産を使ってしまった。何もかも使い果たしたあとで、その国に大ききんが起こり、彼は食べるにも困り始めた。

それで、その国のある人のもとに身を寄せたところ、その人は彼を畑にやって、豚の世話をさせた。彼は豚の食べるいなご豆で腹を満たしたいほどであったが、だれひとり彼にあたえようとはしなかった。

しかし、我に返ったとき彼は、こう言った。『父のところには、パンのあり余っている雇い人が大ぜいいるではないか。それなのに、私はここで、飢え死にしそうだ。立って、父のところに行って、こう言おう。『お父さん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません。雇い人のひとりにしてください。』』

こうして彼は立ち上がって、自分の父のもとに行った。ところが、まだ家までは遠かったのに、父親は彼を見つけ、かわいそうに思い、走り寄って彼を抱き、口づけした。

息子は言った。『お父さん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません。』

ところが父親は、しもべたちに言った。『急いで一番良い着物を持って来て、この子に着せなさい。それから、手に指輪をはめさせ。足にくつをはかせなさい。そして肥えた子牛を引いて来てほふりなさい。食べて祝おうではないか。この息子は、死んでいたのが生き返り、いなくなっていたのが見つかったのだから。』そして彼らは祝宴を始めた。

ところで、兄息子は畑にいたが、帰って来て家に近づくと、音楽や踊りの音が聞こえて来た。それで、しもべのひとりを呼んで、これはいったい何事かと尋ねると、しもべは言った。『弟さんがお帰りになったのです。無事な姿をお迎えしたというので、お父さんが、肥えた子牛をほふらせなされたのです。』

すると、兄はおこって、家に入ろうともしなかった。それで、父が出て来て、いろいろなだめてみた。しかし兄は父にこう言った。『ご覧なさい。長年の間、私はお父さんに仕え、戒めを破ったことは一度もありません。その私には、友だちと楽しめと言って、子山羊一匹くくださったことはありません。それなのに、遊女におぼれてあなたの身代を食いつぶして帰って来たこのあなたの息子のためには、肥えた子牛をほふらせなされたのですか。』

父は彼に言った。『子よ。おまえはいつも私といっしょにいる。わたしのものは、全部おまえのものだ。だがおまえの弟は、死んでいたのが生き返って来たのだ。いなくなっていたのが見つかったのだから、楽しんで喜ぶのは当然ではないか。』』

「生きるを考える」の集い・シリーズの ご案内

フルダミニストリーでは、2016年5月から2017年3月にかけて、この世で与えられた生命^{いのち}、人生をいかに生きるかの貴重なお話を、各専門域の第一線で活躍しておられる英国人講師三人から伺う「生きるを考える」の集いを企画しました。

日本の大学、研究機関に客員教授として招聘されている講師ですので、海外出張も多く、全員の常時出席はかないませんが、日本滞在中、できるだけ多くの時間を、皆さまとのお交わりに費やしたいとのことですので、月一回、日曜日の午後2-4時、この集いを計画しております。

お友だちをお誘いの上、万障繰り合わせてお出かけください。

講師プロフィール

アンナ・ファンセット 英国 国際賞受賞「グランピアン語り部協会」前会長
クリス・ドーン 英国ダラム大学宇宙物理学教授、ブラックホール研究者
ジョン・パーカー 英国ダラム大学数学教授

次回のご案内

日時：6月19日（日）午後2-4時、
場所：町田市民文学会館ことばらんど
会費：300円
連絡先：yosheru.119.7@gmail.com
